

妬婦の怨念

——「吉備津の釜」の磯良の場合から——

太刀川 清

一

『雨月物語』の「吉備津の釜」は、女の嫉妬の発現の相を二つのうらみ、すなわち「恨」と「怨」で捉え、その怨恨をテーマとしたものである。夫の浮気から妬婦となった貞淑な妻の生霊が妾をとり殺し、なおも死霊となって夫を殺害する凄まじい物語である。

その妻の名を磯良、妾を袖、夫を正太郎と言った。俗にいう三角関係の纏れである。

作者の上田秋成はその物語の冒頭に、彼なりの妬婦論を示していた。これは中国明時代の謝肇淛の著『五雜俎』のうち「人部」の妬婦に係わる部分を採つての再構成であ

る。まず、嫉妬を女の悪徳の第一とする世上の通念にしたがつて、妬婦の禍をあげ、よつてこれを批判したうえで、さるためしは希なり。夫のおのれをよく脩めて教へなば、此患おのづから避くべきものを、只かりそめなる徒ごとに、女の慳しき性を募らしめて、其身の憂をもとむるにぞありける。

と言うのは、時代に逆らつて妬婦擁護ともなりかねない口吻であるが、要するに、これを男女の性まで遡つて妬婦の妬婦たる所以の如何を追究しようとするのである。

ちなみに、ここでいう「徒ごと」とは男の好色沙汰、すなわち浮気。「慳しき性」を募したものとは女の嫉妬ということになるうか。そして物語は差し当って、この男の

「徒ごと」を軸に展開するのである。

二

吉備の国、賀夜郡庭妹の郷（いまの岡山市庭瀬のあたり）の井沢正太夫の一子正太郎は家業の農業を嫌い、酒に浸り色に耽って親の言うことも聞かない。その正太郎に「道楽息子には嫁を」ということで、吉備津神社の神主の娘、磯良が迎えられることになる。「吉備津の神主香央造酒が女子は、うまれだち秀丽にて、父母にもよく仕え、かつ歌をよみ、箏に工なり」という娘は、嫁しても「夙に起、おそく臥て、常に舅姑の傍を去ず」しかも、「夫の性をはかり心を尽して仕へる」いわゆる封建婦道を説く「女大学」をそのままの女、まさしく貞婦貞女というべき井沢家の嫁であつた。

しかし「完璧な嫁が最高の妻であつたか」磯良が完璧であればあるほど正太郎の負担は大きくなり、果ては、近在の軻の津の遊女、袖と馴染を重ね、これを身請けするのである。

そこで秋成は言う。

されどおのがままの姦たる性はいかにせん。いつの比より軻の津の袖といふ妓女にふかくなじみて、遂に贖ひ出し、ちかき里に別荘をしつらひ、かしこに日をかさねて家にかへらず。磯良これを怨みて、或は舅姑の忿に托て諫め、或いは徒なる心をうらみかこてども、大虚にのみ聞きなして、後は月をわたりてかへり来らず。

これが正太郎の「徒ごと」である。男の「徒ごと」は、この「姦たる性」に由来するものであつたのである。二、三の字典によると、「姦」とは『説文』に「姦、姪也、『集韻』にも「姦、犯姪」わが『新撰字鏡』に「姦、犯姪也」多波久、その例に『古事記』の「仲哀記」に「上通下通婚」（みだらな通婚と訳す）などがある。秋成はこの「姦たる性」を男の本然の性と措定し、女の「慳しき性」と対置することで、男の情の流れと女の情の流れの絡みの中で物語を進めて行くのである。

ここではじめて「怨」と「うらみ」の語が出る。作者は「怨」で、かかる事態での磯良の怒り高ぶる感情をそのまま表現したものの、貞婦であるべき自らを思えば、その直

情も許されず、夫の徒なる心をただ恨み託たなければならなかつた磯良の氣持まで立ち入ろうとする。

かくして、正太郎の「奸たる性」は磯良を欺き袖と驅落ちすることになる。再び秋成は言う。

かくまでたばかれしかば、今はひたすらうらみの歎きて、遂に重き病に臥しける。

「うらみ」は「恨」の字を充てるがよからう。男に裏切られ捨てられても怒り怨むことが禁じられていた「女大學」の時代、歎き託つよりほかにすべのなかつた女のやるせない氣持を表現した「恨」である。磯良のごとき自らの意志と行動を失つた貞婦には唯一男に向けて許された感情の表出を意味した「恨」である。それが貞婦のさだめであつたことは、同じ『雨月物語』の「浅茅が宿」の女主人公宮木を見るとよい。^(注3)

三

だがしかし、磯良はこの時まで袖にどれほどの嫉妬をもつたであろうか。正太郎の驅落ちは妻としての矜持を傷つけられはしたが、磯良が心底袖に嫉妬の炎を燃やしたの

は、身請けでもなく驅落ちでもなく、病み衰えていく袖を「みづからも食さへわすれて抱き拭く」る正太郎の袖に対する献身ぶりに、己にはついぞ見せることのなかつた眞の愛情を知つた時ではなかつたか。かくして磯良の嫉妬は昂じて極限に達し、生霊となつて袖殺害へと進むのである。

けれども、それは物語の表には書かれることはなかつた。そして正太郎を恨んで「恨死」するところもない。秋成が再び書き出したのは、「恨死」した磯良が死霊となるに及び、「恨」が「怨」に転じるそこからである。物語は正太郎の「奸たる性」をうまく騙らつて、野末の草屋に誘ひ、「めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまゐらせん」と詰る、死病の女、磯良に復讐を予告させるところから物語の後半は始まる。

磯良の死霊の禍を恐れた正太郎が頼つたのは陰陽師であつた。秋成はその陰陽師に、つぎのように言わせている。

災すでに窮りて易からず、さきに女の命をうばひ、^{わざはひ}
怨み猶尽きず。足下の命も旦夕にせまる。^{せま やす}
^{そこ}
^{あさゆふ}

と、袖を殺害したのが磯良の「怨」であつたことを明ら

かにしたうえで、なおもその「怨」が、正太郎に迫りつつあるというのである。ここでは男に寄せた女の「恨」が「恨死」の果てに「怨」に転じて復讐へ進もうとしていることを知るべきである。

凡そ、かかる男女の三角関係にあつては、女が男の浮気を知ったとき、他の女へ寄せる愛情を知ったとき、女心はその女に対して「妬」をもつ。と同時に男には「恨」として発現する。これが「慳しき性」の両面である。その「妬」が昂じて「怨」となり生霊となつて女を殺害する。

一方、「恨」は恨死によつて「怨」に変わり、死霊となつて復讐を果たす。つまり生霊はその女の殺害に至ることがあつても、男への復讐は死霊とならなければ果たせなかつたのである。「死んで恨みを晴らしてやる」というのはかかることである。「恨めしや」というのも、女が男にかぎつて詰じることばである。

四

「恨」と「怨」はともに「うらみ」と訓む。辞典の類を繙くと、「恨死」はあつても「怨死」はない。「恨霊」はな

くても「怨霊」はある。「生きての恨」「死んでの怨」と區別出来るかも知れない。「恨」と「怨」は同類ながらいささか語義に違いがありそうである。ちなみに『集韻』には「怨、讐也恚也」。『説文』には「恚也」。『増韻』に「仇也、讐也」とある。「恨」にはその「讐、仇、恚」の意がなく、「恨」には代つて「悔」とあるのが特徴的である。されば「怨敵」「怨仇」「怨讐」「怨恚」などすべて復讐を思わせる語群である。ちなみに「恨」には「恨色」「恨心」「恨候」「恨惋」などの語が見える。

かくて物語は「恨死」によつて「怨霊」と化した磯良は復讐の鬼となつて正太郎に襲いかかることになる。

かの鬼も夜ごとに家を繞り、或は屋の棟に叫びて、忿れる声夜ましますさまじ。

鬼は死者の霊である、恚り狂う磯良の怨霊は、忌わしくも読者の幻想のうちに復讐を果たすことで物語はおわる。

五

復讐はおわつた。それにしても戸脇の壁の生々しい血と男の髪の毛ばかり残して、正太郎の屍体がどこにもなかつ

たというのは不可解な結末である。国文科「日本文学研究」の最後の授業は奇しくもこの末段であった。そこで「正太郎の躰はどこに、どうなってしまったのか」と問いを設けて訊ねてみた。学生の答は、凄まじいなぶり殺しの顛末がそこにあったはずだという者のほか、貞婦の磯良がはじめて寄せた愛情の証として連れ去った、いや抱え去ったとする者が尠からずあったことに心ひかれた。それは、女の情の流れとして、「怨」のつぎは「何か」を察した女子学生が、敢て磯良に寄せた哀憫からの答えであったかも知れない。春色未だに遠い昼下りの教室でのことであつた。

(注1)『女大学』(貝原益軒、享保十九年)から関連部分をひく。

一、女子は(略)夫の家に行ては、専嬢(しうとしうとめ)をわが親よりも重じて、厚く愛しみ敬ひ、孝行を尽すべし。親の方を重じ、舅の方を軽ずることなかれ。嬢の方の朝夕の見まひを闕べからず。(略)

(注2)(注1)と同じ『女大学』から。

一、嫉妬の心、努々発すべからず。男淫乱ならば諫むべし。怒り怨べからず。(略)若、夫不義過有ば、わが色を和らぎ、声を雅にして諫むべし。諫を聴ずして怒らば先づ暫止て、後に夫の心和たる時、復諫べし。必ず気色を暴くし、こゑをいらぎて、夫に逆ひ叛ことなかれ。(略)

(注3)卷二「浅茅が宿」で、夫の勝四郎の留守を守った貞婦の宮木の亡霊が、再会して勝四郎に言うことば。

「…今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく待り。逢ふを待つ間に恋ひ死なんは、人しらぬ恨みなるべし」など参考になろう。